

青年期における友人関係ルールの適用

The Application of the Rule of Friendship in Adolescence

藤 田 文

Aya Fujita

ABSTRACT

The purpose of this study was to investigate the application of the rule of friendship in adolescence. One hundred fifty-seven college students (M.A.=21.0) were asked to complete the questionnaire regarding the rule of friendship; the content of explicit rule and implicit rule, the flexibility of the rules, and the necessity of the rules. The results showed that (1) the implicit rules were applied more than the explicit rule, (2) the college students applied the explicit rule to the situation that they try to contact their friend, but they applied the implicit rule to the situation that they communicate with their friend directly, and (3) while they applied the rules inflexibly concerning the individual problem, they applied them flexibly concerning their interaction. These results suggest that adolescents regulate peer relationship applying some kinds of rules according to situations.

Key words: rule of friendship, adolescence, peer relationship

問題と目的

Argyle & Henderson (1985) によれば、ルールとは多くの人が「すべきだ」または「すべきでない」と考え、信じている行動であると定義される。従来の研究では、ルールの中でも、他者の権利や福祉に関する道徳のルールと社会的相互作用を円滑にし秩序を維持する社会的慣習のルールに焦点が当てられていた (Bennett, 1993; Nucci & Nucci, 1982; Nucci & Turiel, 1978; Smetana, 1981; Weston & Turiel, 1980)。つまり、すでに社会の中に存在する道徳や慣習のルールをどのように概念的に区別して理解していくのかといった観点からルール概念の発達的变化が検討されてきた。

ところが、近年、日常生活場面においてルールを遵守するかどうかには、道徳や慣習ルールの理解度だけでなく、その場面での対人関係が影響を与えることが指摘されている (Smetana, Killen, & Turiel, 1991)。例えば、道徳的にそのルールに違反することが悪いと認識していても、親しい人に頼まれたりするとその人との対人関係を配慮してルール違反をする場合があるというものである。このように人は、特定の他者との関係の中であるルールを適用するかどうかを判断し、ルールの適用法を変えることで他者との関係を維持したり調整したりしている。

従って、日常生活場面における対人関係ルールの様相を明らかにするためには、人が道徳や

社会的慣習のようにすでに存在しているルールをどのように理解しているかという点よりも、むしろ、人が日常的で親密な対人関係においてどのようにルールを適用しているのかという点について検討する必要がある。

また、これまでの大学生の友人関係に関する研究では、一般的な友人関係について心理的距離の取り方や自己概念への影響を調べたものが多く(岡田,1993,1995; 上野・上瀬・松井・福富,1994; 落合・佐藤,1996)、特定の親密な友人関係については十分な検討がなされていなかった。だが、特定の親密な友人関係の中で種々のルールをどのように適用するかを検討することによって、大学生の友人関係の日常的な関係調整のあり方が明らかになると考えられる。

そこで本研究では、青年期の大学生に焦点を当て、大学生が日常の親密な友人関係の中でどのようにルールを適用しているのかについて以下の3点を検討することを目的とする。

第1に、日常の友人関係の中でどの程度ルールが産出されているかというルール適用の程度を検討する。すなわち、友人関係の中で産出されているルールについて被験者に自由記述を求め、その量的側面を明らかにする。

第2に、大学生がどのようなルールを用いて対人関係を調整しているかというルールの適用内容について検討する。この点に関しては、Argyle & Henderson (1985)によって、大学生の友人関係にとって重要なルールが見出されている。しかし、Argyleらの研究では、友人関係の中で「何をすべき」で「何をすべきでないか」を質問して、友人関係において重要とされるルールを抽出しており、実際に友人との間でそのルールを取り決めて共有していたのかどうかは明らかではない。そこで、本研究では、友人間で言語的に明確に決めている明示ルールと、言語的に明確に決めてはいないがそのようになっているという暗黙ルールを区別した上で、被験者にそのルールの内容を質問し、両者の内容を比較することにした。

また、友人関係において交際期間が長くなれば、新たなルールを産出したり、ルールの適用法を変化させたりしなければならなくなると考えられる。従って、ルールの適用の程度とルールの内容について、交際暦によってどのような違いが見られるのかもあわせて検討する。

第3に、ルール適用の柔軟性を検討する。ルール適用の柔軟性とは、ルール違反をどの程度許容できるかということである。従来の研究では、道徳ルールや社会的慣習ルールに関する柔軟性が検討されており、社会的慣習ルールについては加齢に伴い柔軟性が増すが、道徳ルールについては柔軟性の増加はあまり大きくないことが示されているとともに(Nucci & Turiel, 1978)、柔軟性がルール適用のあり方を探る上で重要であると指摘されている(Levy, Taylor, & Gelman, 1995)。そこで本研究でも柔軟性を取り上げ、まずルールの内容による柔軟性の違いについて、次にルールの必要性について調べ、両者の関係を検討する。最後に、自己に対するルール適用の柔軟性と他者に対するそれとの違いを比較しながら、自他の関係の中でのルール適用の柔軟性について検討する。

方 法

被験者：本研究の被験者は、4年制大学法学部2年生から4年生までの学生157名(男性81名・女性76名)だった。平均年齢は、男性21.0歳、女性21.0歳、全体では21.0歳だった。

手続き：「対人関係に関するアンケート」と称して質問紙調査が講義時間中に集団で実施された。質問紙では、非常に親しい同性の友人(親友)を一人特定してもらい、その人をAさんとし

て、Aさんと自分との関係について質問に答えてもらった。

質問内容は、①Aさんとの関係と交際暦、②明示ルール・暗黙ルールの内容、③ルール適用の柔軟性、④ルールの必要性についてだった。具体的にはまず、Aさんの年齢と自分との関係と交際暦を記入してもらった。そして、Aさんとの関係の中で「言葉の上で明確に決めている決まりごと、ルール、約束事（明示ルール）」を箇条書きで自由記述してもらった。自由記述された個々のルールについて、そのルールをAさんが守らなかったらどの程度許せると思うか、自分が守らなかったらどの程度許されると思うかについて4段階（許せる～許せない）で、そのルールがどの程度必要かについて5段階（非常に必要である～まったく必要ない）で評定してもらった。次に、Aさんとの関係の中で「言葉の上で明確にそうするように決めてはいないが、なんとなくそのようになっているという決まりごと、ルール、約束事（暗黙ルール）」を箇条書きで自由記述してもらった。その後、明示ルールと同様に、ルールに対する柔軟性と必要性について評定してもらった。明示ルールと暗黙ルールの質問の提示順序はカウンターバランスされた。

結 果

（1）友人関係におけるルール適用の程度

親友との関係の中でどの程度ルールを用いているかというルール適用の程度を、自由記述されたルール数によって検討した。明示ルールの平均個数は男性が0.9個、女性が0.8個、全体が0.8個でいずれも1個以下であった。暗黙ルールの平均個数は男性が2.0個、女性が2.4個、全体が2.2個だった。全体的に明示ルールよりも暗黙ルールの適用の程度が高かった。

次に、ルール適用の程度が交際暦によって異なるのかどうかについて検討した。親友との交際暦別の人数を表1に示した。親友との交際暦の平均は男性が5.4年、女性が5.0年、全体で5.2年だった。交際暦別に明示ルールと暗黙ルールの平均個数を算出し、表2と表3に示した。その結果、明示ルールも暗黙ルールも共に、男性では交際歴2年未満でのルール数が多く、2～5年で一旦減るがその後ルールが増加するパターンで、女性では交際歴が長くなるとルールが単調に増加するパターンが見られた。

（2）ルールの適用内容

被験者に自由記述してもらった明示ルールと暗黙ルールの具体的な内容を検討した。同じ内容を示しているものを実験者がまとめて表4、5に示すように分類した。なお、表に示された数値は、自由記述から得られたルールの総数である。

まず、二人の間で言語的に明確に決めている明示ルールについてその内容を検討した（表4

表1 親友との交際歴別人数

	2年未満	2～5年	5～10年	10年以上
男性	11	37	15	18
女性	15	31	22	8
合計	26	68	37	26

表2 明示ルールの交際歴別平均個数

	2年未満	2～5年	5～10年	10年以上	全体平均
男性	1.18	0.70	1.00	1.06	0.90
女性	0.53	0.77	0.82	1.13	0.78

表3 暗黙ルールの交際歴別平均個数

	2年未満	2～5年	5～10年	10年以上	全体平均
男性	2.36	1.62	2.13	2.61	2.04
女性	2.13	2.06	2.41	4.25	2.41

参照)。その結果、「金銭の貸借に関するルール」と「連絡頻度・連絡方法に関するルール」が同じ程度多かった。「金銭の貸借に関するルール」は、お金の貸し借りはしない、お金に余裕のある方がおごる、お金を借りたらきちんと返すというような内容だった。また、「連絡頻度・連絡方法に関するルール」は、必要ときだけ会う、定期的に飲みに行く、家にくるときは連絡してからくる、会うときは電話する、電話は交代でかけるというような内容だった。3番目に多いのが、「約束・時間の厳守に関するルール」で、これは時間に遅れない、約束は守るといったような内容だった。4番目に多いのが、「行動を共にするルール」で、一緒に講義に出るようにしている、一緒に昼食をとる、一緒にバイトに行く、遊びに行くときは誘うというような内容だった。なお、「連絡頻度・連絡方法」と「物品の貸借に関するルール」は男性に多く、「物品の贈与に関するルール」は女性に多かった。

次に、二人の間で言語的に明確に決めてはいないが、いつのまにかそうなっているような暗黙ルールについてその内容を検討した(表5参照)。その結果、「会話内容・会話方法についてのルール」が最も多かった。この中には、異性の話はいつもする、共通の趣味について話す、サークル内のことを話す、プライベートな話題を話す、近況報告をするというように、話題にする内容のものと、それとは逆に、異性の話はしない、家族の話題は避ける、プライベートな話は無理に聞かない、成績の話はしない、暗い話題・硬い話題は避ける、下品な話題は避けるというような話題にしない内容のものがあつた。また、会話を楽しくする、ほけたら突っ込む、相手が話しているときは黙る、本音で話す、相談し合うというような会話方法についてのルールもみられた。

2番目に多いのが、「行動を共にするルール」でこれは明示ルールとほぼ同じ内容であつた。3番目に多いのが、「役割の分化に関するルール」だつた。この中には、自分がいつも聞き役になっているや自分がお世話役や慰め役になっているというような内容と、自分が相談して相手が聞き役になっているや相手がリードして自分がそれに従うというような内容と、どちらの優位もなく平等につきあうという内容もみられた。このルールは全体的に女性に多く見られた。ただし、自分が聞き役になったり、世話役になっているというルールは男女共に見られたが(男性5個、女性11個)、相手が聞き役になったり相手がリードするというルールは女性に多く、男性にはほとんど見られなかつた(男性1個、女性12個)。4番目に多いのが、「連絡頻度・連絡方法に関するルール」で、これは明示ルールとほぼ同じ内容であつた。

以上のように、明示ルールと暗黙ルールに共通に多かったルールは、「連絡方法・連絡頻度」に

青年期における友人関係ルールの適用

表4 明示ルールの内容と記述されたルール数

内 容	男性	女性	合計
金銭の貸借	13	9	22
連絡頻度・連絡方法	18	4	22
約束・時間の厳守	9	8	17
行動を共にする	7	9	16
物品の貸借	7	0	7
会話内容・会話方法	3	4	7
将来に関すること	2	4	6
長期休暇時の連絡等	2	3	5
うそをつかない	0	4	4
秘密の厳守	0	3	3
物品の贈与	0	3	3
個人の尊重	2	0	2
情報交換	2	0	2
協力・助け合い	0	2	2
その他	6	4	10
合 計	71	57	128

表5 暗黙ルールの内容と記述されたルール数

内 容	男性	女性	合計
会話内容・会話方法	53	49	102
行動を共にする	25	33	58
役割の分化	19	31	50
連絡頻度・連絡方法	14	20	34
個人の尊重	7	9	16
金銭の貸借	8	4	12
第三者との関係	2	8	10
約束・時間の厳守	6	2	8
気づかい	3	3	6
物品の貸借	3	2	5
協力・助け合い	3	2	5
秘密の厳守	2	3	5
情報交換	4	0	4
けんか時の対処	2	2	4
物品の贈与	0	1	1
その他	9	9	18
合 計	160	178	338

関するルール」と「行動を共にするルール」だった。また、各ルールに特徴的な内容も見出された。明示ルールに多く見られた特徴的な内容は、「金銭の貸借に関するルール」と「長期休暇時の連絡や将来に関するルール」（例：結婚式に呼ぶ・何十年後かにどちらがすばらしい人生だったか話す）だった。暗黙ルールに多くみられた特徴的な内容は、「会話内容・会話方法に関するルール」、「役割の分化に関するルール」、「個人の尊重に関するルール」、「第三者との関係に関するルール」、「気づかいに関するルール」だった。「個人の尊重に関するルール」は、お互いの人格を尊重する、意見を押し付けない、強制しないというような内容だった。「第三者との関係に関するルール」は、互いの友人を紹介する、第三者の悪口を一緒に言う、他の友人との付き合いを制限しないというような内容だった。「気づかいに関するルール」は、変な気は使わない、程よく気を使うというような内容だった。

(3) ルールの適用内容と交際暦

交際暦によって二人の間にあるルールの適用内容に違いが見られるのかどうかを検討するために、(2)で示したルールの内容を交際暦別に記述の数が多い順に並べ替えた(表6・7参照)。

① 明示ルール

表6より、「連絡頻度・連絡方法に関するルール」と「約束・時間の厳守に関するルール」は交際暦に関わらず共通してみられたルールだった。「行動を共にするルール」は交際暦が短

い間に見られるが交際暦が長くなるに従って減少する傾向にあった。「金銭の貸借や物品の贈与に関するルール」は交際暦が短い間は見られないが、交際暦が長くなってくるとみられるようになるルールだった。「長期休暇時の連絡や将来に関するルール」は、交際暦が5年以上10年未満の時に特にみられるルールだった。

② 暗黙ルール

表7より、「行動を共にする」、「会話内容・会話方法」、「連絡頻度・連絡方法」、「役割の分化」という上位4位までのルールは交際暦によって変化することはなかった。しかし、「行動を共にするルール」は交際暦が短い場合に多く、交際暦が長くなるに従って減少する傾向にあった。逆に、「会話内容・会話方法」と「役割の分化に関するルール」は交際暦が長くなるに従って増加する傾向にあった。「金銭の貸借」と「第三者との関係についてのルール」は交際暦が短い場合は少なく、交際暦が2年以上になって見られるルールだった。

さらに、ここでは「会話内容・会話方法」、「連絡頻度・連絡方法」、「役割の分化に関するルール」についてその内容に交際暦による違いが見られるのかどうか検討した。その結果、「役割の分化に関するルール」の中で、女性にのみ、自分が聞き役や世話役になっているというルールと相手が聞き役になったりリードするというルールについて交際暦による違いが見られた。これらのルールを記述した女性被験者の交際暦を比較した結果、相手が聞き役になっているというルールを用いた被験者（平均交際暦3.9年）よりも自分が聞き役になっているというルールを用いた被験者（平均交際暦8.6年）のほうが交際暦が長いことが見いだされた。

（4）ルール適用の柔軟性

自由記述されたルールについて、そのルールを相手が守らなかった場合どの程度許せるか、また自分が守らなかった場合どの程度許されると思うか評定を求め、これをルール適用の柔軟性の測度とした。評定は4段階で、評定値が高い方がルールに対する柔軟性が高いことを示している。ルールの内容ごとにこの評定値の平均を算出し、柔軟性の高い方から順にならべて表8・9に示した。さらに、必要なルールほどルール違反に対する柔軟性が低くなるのかどうかを調べるために、そのルールがどの程度必要かについても評定を求めた。評定は5段階で、評定値が高い方がルールの必要性が高いことを示している。ルールの内容ごとにこの評定値の平均を算出して表8と9に示した。これらの表より次の4点が明らかになった。

第1に、表8と表9の比較により、明示ルールについてよりも暗黙ルールについてルール適用の柔軟性が高いことが示された。

第2に、ルールの内容による柔軟性の高低は明示ルールと暗黙ルールとで類似していた。つまり、明示ルール、暗黙ルールともに、「連絡頻度・連絡方法」、「行動を共にする」、「会話内容・会話方法についてのルール」は柔軟性が比較的高かった。また、明示ルール、暗黙ルールともに、「金銭の貸借」、「物品の貸借」、「個人の尊重」、「秘密の厳守についてのルール」は柔軟性が低かった。

第3に、柔軟性と必要性の間に一定の関連が見られた。暗黙ルールにおける「役割の分化に関するルール」と男性の「第三者との関係ルール」のみ3点未満の評定値になっており、ルールの必要性が低かった。それ以外のルールは3点以上で、必要性が認められたルールであった。表より、全体的に、必要性の低いルールについては柔軟性が高く、必要性の高いルールについては柔軟性が低くなっていた。

青年期における友人関係ルールの適用

表6 交際暦による明示ルール数

2年未満	ルール数	2年以上5年未満	ルール数	5年以上10年未満	ルール数	10年以上	ルール数
行動を共にする	5	金銭の貸借	11	連絡頻度・方法	5	連絡頻度・方法	8
連絡頻度・方法	5	行動を共にする	8	金銭の貸借	4	金銭の貸借	6
約束・時間厳守	3	約束・時間厳守	7	約束・時間厳守	4	約束・時間厳守	3
金銭の貸借	1	物品の貸借	5	長期休暇時連絡	4	物品の贈与	3
協力・助け合い	1	連絡頻度・方法	4	将来に関する事	4	行動を共にする	2
秘密の厳守	1	会話内容・方法	4	会話内容・方法	3	物品の貸借	1
個人の尊重	1	うそをつかない	3	行動を共にする	1	将来に関する事	1
将来に関する事	1	将来に関する事	1	物品の貸借	1	協力・助け合い	1
長期休暇時連絡	1	情報交換	1	うそをつかない	1	情報交換	1
会話内容・方法	0	秘密の厳守	1	秘密の厳守	1	秘密の厳守	0
情報交換	0	個人の尊重	1	協力・助け合い	0	うそをつかない	0
うそをつかない	0	協力・助け合い	0	個人の尊重	0	個人の尊重	0
物品の貸借	0	長期休暇時連絡	0	情報交換	0	会話内容・方法	0
物品の贈与	0	物品の贈与	0	物品の贈与	0	長期休暇時連絡	0

表7 交際暦による暗黙ルール数

2年未満	ルール数	2年以上5年未満	ルール数	5年以上10年未満	ルール数	10年以上	ルール数
行動を共にする	18	会話内容・方法	31	会話内容・方法	30	会話内容・方法	28
会話内容・方法	13	行動を共にする	29	役割の分化	18	役割の分化	12
連絡頻度・方法	7	役割の分化	13	連絡頻度・方法	12	連絡頻度・方法	6
役割の分化	7	連絡頻度・方法	9	行動を共にする	6	行動を共にする	5
個人の尊重	3	個人の尊重	8	金銭の貸借	4	第三者との関係	3
気づかい	2	金銭の貸借	6	第三者との関係	2	個人の尊重	3
秘密の厳守	1	約束・時間厳守	5	個人の尊重	2	けんか時の対処	2
第三者との関係	1	第三者との関係	4	秘密の厳守	2	金銭の貸借	2
約束・時間厳守	1	情報交換	3	約束・時間厳守	1	物品の貸借	2
けんか時の対処	1	協力・助け合い	3	物品の貸借	1	秘密の厳守	1
情報交換	0	気づかい	3	協力・助け合い	1	気づかい	1
協力・助け合い	0	物品の貸借	2	けんか時の対処	1	約束・時間厳守	1
物品の貸借	0	秘密の厳守	1	情報交換	1	協力・助け合い	1
金銭の貸借	0	けんか時の対処	0	物品の贈与	1	情報交換	0
物品の贈与	0	物品の贈与	0	気づかい	0	物品の贈与	0

表8 明示ルールの柔軟性・必要性の平均評定値

ルールの内容	柔軟性				必要性	
	男性		女性		男性	女性
	自分	友人	自分	友人		
連絡頻度・連絡方法	3.2	2.8	3.8	3.3	3.8	3.5
行動を共にする	3.1	3.1	3.6	3.0	3.6	3.9
協力・助け合い	—	—	3.5	3.0	—	3.5
長期休暇時の連絡等	2.5	2.0	3.0	3.0	3.5	4.3
会話内容・会話方法	2.3	3.0	2.5	2.3	4.7	4.8
約束・時間の厳守	2.7	1.9	2.5	2.1	4.4	4.0
金銭の貸借	2.5	2.5	2.2	2.1	4.2	4.0
将来に関すること	1.5	1.5	2.8	2.5	3.0	4.0
物品の貸借	1.9	2.3	—	—	4.4	—
個人の尊重	2.0	1.5	—	—	4.5	—
物品の贈与	—	—	1.5	1.5	—	4.3
うそをつかない	—	—	1.5	1.5	—	4.8
情報交換	1.5	1.0	—	—	4.0	—
秘密の厳守	—	—	1.0	1.0	—	5.0

表9 暗黙ルールの柔軟性・必要性の平均評定値

ルールの内容	柔軟性				必要性	
	男性		女性		男性	女性
	自分	友人	自分	友人		
物品の贈与	—	—	4.0	4.0	—	3.0
役割の分化	3.7	3.7	3.7	3.4	2.7	2.9
行動を共にする	3.6	3.7	3.6	3.4	3.4	3.2
情報交換	3.5	3.8	—	—	4.8	—
連絡頻度・連絡方法	3.4	3.4	3.7	3.7	4.1	3.2
約束・時間の厳守	3.2	3.3	3.0	3.0	3.3	3.5
第三者との関係	3.0	3.0	3.0	3.2	2.5	4.1
会話内容・会話方法	3.2	3.2	3.3	2.8	4.0	3.9
協力・助け合い	3.7	3.7	2.5	2.5	4.7	5.0
気づかい	2.3	2.3	4.0	3.0	5.0	4.0
個人の尊重	3.1	3.1	2.8	2.1	3.6	3.6
けんか時の対処	3.0	2.0	3.0	2.0	3.5	4.0
物品の貸借	2.3	2.7	3.0	2.0	3.7	3.0
金銭の貸借	2.6	2.3	1.5	1.5	4.3	4.0
秘密の厳守	2.5	2.0	2.0	1.7	5.0	4.3

第4に、自分に対するルール適用の柔軟性と友人に対するそれとの違いが認められた。表8・9に示された柔軟性評定値について自分と友人に対する評定を比較し、自分の方に柔軟性が高いルール、友人の方に柔軟性が高いルール、自分と友人で柔軟性が同じルールに分類した。その結果、明示・暗黙両ルールにおいて、男性・女性とも、自分の方に柔軟性が高いか、同程度のルールが多かった。また、男性では、友人の方に柔軟性が高いルールが明示ルールで2個、暗黙ルールで4個見られたが、女性では明示ルールで0個、暗黙ルールで1個しか見られなかった。よってルールの適用の仕方は、自分の方に柔軟性が高く、その傾向は女性の方に強いようである。

考 察

本研究の目的は、大学生が親密な友人関係において、どのように友人関係ルールを適用しているのかについて明らかにすることだった。

まず、友人関係ルールをどの程度適用しているのかというルール適用の程度について検討した。その結果、明示ルールよりも暗黙ルールの方がルール適用の程度が高いことが明らかになった。このことから、大学生の友人関係においては言語的に明確に取り決めるという形でルールを適用することは少なく、むしろ、暗黙のうちにルールが適用されているという場合が多いといえよう。また、交際暦との関係を調べた結果、明示ルールも暗黙ルールも、男性では交際暦2年未満でルール数が多く、2～5年でいったん減るがその後ルールが増加するパターンが見られたが、女性では交際暦が長くなるとルールが単調に増加するパターンが見られた。つまり、大学生の友人関係では、関係開始の段階でルールの適用の仕方に性差があることがわかった。男性は友人関係の開始段階でルールを適用しながら関係を作っていくが、女性は友人関係の開始段階ではルールを適用せずに関係を作っていくようである。しかし、本研究では自由記述されたルールの数が比較的少なく、それが実際にルールが存在していないことを示すのか、存在しているのだが意識化もしくは再生できなかつたのかは明らかでない。従って、今後は、収集された自由記述をリスト化し、再認法を用いてルールの適用の程度について検討する必要もあるだろう。

次に、ルールの適用内容については、明示ルールと暗黙ルールに見られる共通の特徴と異なる特徴とが明らかになった。共通に多く見られたルールは、「連絡頻度・連絡方法に関するルール」と「行動を共にするルール」だった。これらのルールは、友人関係において「すべきだ」または「すべきでない」ことを問うことによって友人関係ルールを抽出した Argyle ら (1993) の研究では見出されていなかったものである。従って、これらのルールは、従来の研究で見出されていたような観念的なルールというよりは、大学生がより日常的に適用している実際的なルールであると考えられる。大学生の友人関係においては行動を共にするために、どのように連絡を取り合ったりするか、どこでどのように共に行動するかということに関するルールを適用して相手との関係を調整しているといえよう。また、交際暦別のルール内容の結果からも、「行動を共にするルール」が特に交際暦2年未満の友人関係で多く見られることが示されている。このことから、大学生の友人関係においてこのようなルールが関係開始の時期から重要な意味を持っていることが示唆される。

また、本研究では友人関係のルールを明示ルールと暗黙ルールに区別して調査したが、明示

ルールに特徴的なルールは、「金銭の貸借に関するルール」と「長期休暇時の連絡や将来に関するルール」であった。金銭の貸借に関してはトラブルを避けるために明確に決めておく必要性から生じたルールであると解釈できよう。また、長期休暇時の連絡や将来に関するルールが明示ルールに特徴的であったが、これは相手と離れている場合、関係を維持するために明示ルールを適用していると解釈できよう。

一方、暗黙ルールに特徴的なルールは、「会話内容・会話方法」や「役割の分化に関するルール」、「個人の尊重に関するルール」、「第三者との関係に関するルール」、「気づかいに関するルール」だった。これらは、Argyleら(1993)によって見出されたルールと同一のルールが多かった。従って、Argyleらによって見出されたルールは、言語的に明確な取り決めのないまま一定のルールとなって友人間で適用されている種類のものであることが示唆された。また、暗黙ルールで多く見られた「会話内容・会話方法」や「役割の分化に関するルール」は、コミュニケーションに関するルールであると考えられる。大学生は対面的・直接的なコミュニケーションに関しては、明示ルールではなく暗黙ルールを適用して関係を調整していると考えられる。興味深いことに、これらのルールは交際暦が長くなるにつれ増加傾向が認められた。すなわち交際暦が長くなるに連れて、友人関係の中で会話の内容や方法についてや役割についてルールが適用され、相手との関係が調整されていく様相が反映されているといえよう。

加えて、「役割の分化に関するルール」の中で特徴的だったのが、どちらが聞き役になっているかというルールだった。男性ではこれに関するルールが少ないのに対し、女性では、このルールが比較的多く、交際暦が短いと相手が聞き役になっている反面、交際暦が長いと自分が聞き役になっていることが多かった。このことから、暗黙の「役割分化のルール」に関しては、友人関係の進展とともにルールの中味が変化していく可能性もあり、友人相互のルールの共有化のプロセスについて、さらに検討する必要があるだろう。

最後に、ルール適用の柔軟性について検討した結果、全体的には明示ルールよりも暗黙ルールの方が柔軟性が高かった。また、明示ルールと暗黙ルールとも「連絡頻度・連絡方法」、「行動を共にする」、「会話内容・会話方法についてのルール」では柔軟性が高く、「金銭の貸借」、「物品の貸借」、「個人の尊重」、「秘密の厳守についてのルール」では柔軟性が低いことが明らかになった。これについては、ルールの必要性との関連も見られ、柔軟性が高いルールについては必要性が低く、柔軟性が低いルールについては必要性が高くなっていた。すなわち、個人の利益や権利に関わるルールについては、ルールの必要性が高く、ルール違反に対する柔軟性も低かった。他方、相互の関係を維持するルールについてはルールの必要性が低く、ルール違反に対する柔軟性も高いことが示された。さらに、自分に対する柔軟性の方が友人に対する柔軟性よりも高く、ルールが自己と友人で平等に適用されていない可能性が示唆された。

以上のように、本研究では、大学生の友人関係で日常適用されているルールについて検討した。その結果、①大学生の友人関係では、互いに連絡を取り合ったり、共に行動することに関わるルールが多く適用されていること、②相手と接触したり、連絡をとろうとする場合には明示ルールを、対面的・直接的なコミュニケーションに関わる事柄については暗黙ルールを適用していること、③個人を尊重するような事柄については厳しくルールを適用し、相互の関係を維持するための事柄には柔軟にルールを適用していることが明らかになった。これらの結果から、大学生は状況に応じてルールの適用法を変化させながら、親密な友人関係を維持していることが示唆された。今後、個々のルールの内容や、自己と他者へのルールの適用法の違いにつ

青年期における友人関係ルールの適用

いて詳細に検討していく必要があるだろう。

引用文献

- アーガイル, M. ヘンダーソン, M. 吉森護(編訳) 1992 人間関係のルールとスキル 北大路書房(Argyle, M., & Henderson, M. 1985 *The anatomy of relationships and the rules and skills to manage them successfully*. London : Intercontinental Literary Agency.)
- ベネット, M. 二宮克美・子安増生・渡辺弥生・首藤敏元(訳) 1995 子どもは心理学者<心の理論>の発達心理学 福村出版 (Bennet, M. 1993 *The child as psychologist. An introduction to the development of social cognition*. Harvester Wheatsheaf : Prentice Hall.)
- Levy, G.D., Taylor, M.G., & Gelman, S.A. 1995 Traditional and evaluative aspects of flexibility in gender roles, social conventions, moral rules, and physical laws. *Child Development*, 66, 515-531.
- Nucci, L.P. & Nucci, M.S. 1982 Children's social interactions in the context of moral and conventional transgressions. *Child Development*, 53, 403-412.
- Nucci, L.P. & Turiel, E. 1978 Social interactions and the development of social concepts in preschool children. *Child Development*, 49, 400-407.
- 落合良行・佐藤有耕 1996 青年期における友達との付き合い方の発達の变化 教育心理学研究, 44, 55-65.
- 岡田努 1993 現代大学生における「内省および友人関係のあり方」と「対人恐怖的心性」との関係 発達心理学研究, 4, 162-170.
- 岡田努 1995 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心理学研究, 43, 354-363.
- Smetana, J.G. 1981 Preschool children's conceptions of moral and social rules. *Child Development*, 52, 1333-1336.
- Smetana, J.G., Killen, M., & Turiel, E. 1991 Children's reasoning about interpersonal and moral conflicts. *Child Development*, 62, 629-644.
- 上野行良・上瀬由美子・松井豊・福富護 1994 青年期の交友関係における同調と心理的距離 教育心理学研究, 42, 21-28.
- Weston, D. & Turiel, E. 1980 Act-rule relations ; Children's concepts of social rules. *Developmental Psychology*, 16, 417-424.

謝 辞

本研究を実施するに当たりご協力いただきました山口短期大学堀江幸治先生に心から感謝いたします。また、快く調査を引き受けて下さいました学生の皆様に厚くお礼申し上げます。